

かたりべ 45

豊島区立郷土資料館だより

店舗奥の作業場でてきばきとあられを焼く北田夫妻

(写真…文化財係提供)



歴史を感じさせる地球ビンと店台

看板建築が目を引く北田商店

「せんべい命」——大黒煎餅の歴史——

昨年の大晦日、中山道沿いで七〇年以上も煎餅を作りつづけた北田商店（西菓鴨三丁目、屋号・大黒煎餅）が、常連客に惜しまれながら店を閉じました。資料館では、北田好甫・邦子さんご夫婦のご協力を得て、二月一七日、煎餅の製造・販売に関する貴重な資料を一〇〇点余り（車二台分）寄贈していただきました。

北田商店は、石川県出身の父権次氏（明治三一年生まれ）が、佐野屋（小石川区の煎餅屋）に奉公後、大正一一（一九二二）年に独立して高岩寺（通称とげぬき地蔵）近くの家を借りて創業したのに始まります。現在地に移転したのが大正一二年。昭和五（一九三〇）年には三階建てのいわゆる「看板建築」（幅二間半）の店舗兼製造所を構えました。好甫さんが店を継いだのが昭和三三年。以後、米を蒸す↓生地を作る↓干して焼くまでの根気のいる作業を一貫して行ない、煎餅職人の技を守り続けてきました。手作りの大黒煎餅の味に惚れて遠方から買いに来られる常連さんも多かったといえます。

しかし、煎餅がスナック菓子の人気に押され気味となった現在、北田商店のような零細業者は苦境に立たされる時代となりました。

資料館では、昭和初期の中山道商店街の面影を残す北田商店のあゆみを、寄贈資料をもとに紹介、展示しています（6月下旬まで）。（横山）

博物館と子供達

—フランス見たまま—



当館では毎年、一、二月ともなると、小さいお客様の団体で賑わいます。小学三年生の社会科に郷土学習が組み込まれていて、郷土資料館の見学もその一環となっているからです。多い日は二、三校の予約が重なるなど、区内の公・私立の小学生在がひとしきり「としまの昔」をモノを通して学びます。最近目に留まるのは、土曜の午後の子供達です。これは、今回の収蔵展示が「お正月行事と遊びのいろいろ」と題して、今は殆ど廃れてしまった昔の子供達の遊び道具を特集したからではないかと思ひ当たりました。さわれる展示として、お手玉、おはじきを置いてあるのも関心と呼ぶのかも知れません。入館票のアンケートに「三月にはお雛様を飾ってね」という声もありました。次の展示替えが三月下旬なので、お雛



お正月の遊び道具に興味津々の子どもたち(区立時習小学校)

祭りに間に合わないのが残念ですが、要望には応えてあげたいものだと思います。アメリカには、その名もずばり「リーズ・タッチ・ミュージアム」という子供博物館があるそうですが、昨秋の特別展「長崎村物語」でも薬獅子などのブリーズ・タッチ展示を試み好評でした。一方、なぜか中学生の団体見学はここ数年絶えています。夏休みの宿題の「駆け込み寺」的な利用ばかりでは淋しい思いがします。子供達と博物館との関わり方については、昨年一旅行者として眼にした断片的光景が忘れら

れません。パリでの最終日、一日中博物館めぐりと決めて、個人的な四館を地下鉄と徒歩とで駆け巡った時のことです。

まず、**衣装博物館**(ガリエラ侯爵夫人の館)へ。月曜休館とは知りつつギメ博物館への途中、寄り道をしてみました。玄関は閉じているものの庭園への潜り戸は開いていたので入ってみました。庭師が仕事をしています。砂利敷きの広い通路で若い教師らしき男性と小一くらいの一〇名程の子供達がドッジボールに似たゲームをしています。春の光のさわやかな雨上がりの朝。一人若い女性が入って来てベンチで本を読み始めました。穏やかなひとときでした。

次の**ギメ博物館**は全面改装が始まっていて、開いているのは裏手の一部分だけ。それでも展示は「日本・中国の阿弥陀」と日本部門の常設で十分見応えがありました。さすがにここでは子供の姿は見かけませんでした。

それから**人類博物館**へ。これはシャイヨー宮の南の翼に海洋博物館と同居しています。北翼には映画博物館と史蹟博物館が入っています。ちなみにシャイヨー宮は一九世紀以来、パリ博の名所であったトロカデロ宮が、一九三七年のパリ万博の際全面改装されたもので、エッフェル塔の立つシャン・ド・マルス公園を見下ろすセーヌの対岸にあります。この人類博物館は、



衣裳博物館の中庭にて

日本でいえば大阪の国立民族学博物館に人類学的要素を付け加えたものと言えはいいでしょう。有史以前と人類の未来への展望の部に、人類学的視点からの展示手法が用いられています。その展示に「人口爆発を抑止する」といったものがあり、そこに中学生くらいの少年たちが二〇名ばかり、解説者を囲んで真剣な面持ちでノートをとったりパネルを読んだりしています。

最後は、クリュニー博物館。繁華なカルチェ・ラタンの一角に崩れたローマ時代の石壁が眼を惹き、そのローマ浴場跡に建てられた一五世紀の館が、そのまま中世の家具・彫刻・工芸品の博物館となっています。なかでも有名なのは、二階円形の特別室に掛けられた「一角獣と貴婦人」の六枚連作のタピスリーです。光量を抑えた室内に入っすぐ気づいたのは、中央のタピ

スリーの前に車座に坐った小三くらいの子供達一〇余名と三人の女性の姿でした。二名は付添いの教師、もう一人は専門の解説員といった様子で、彼女は低い声で一人一人の子供の瞳を覗き込むようにしながら、噛んで含めるように話しています。子供達は静かに熱心に耳を傾け、作品を見たりしています。一般の入館者も出入りしていますが、お互い全く邪魔になりません。ここではもう一景、聖人の石彫頭部や木像の置かれた明るく広い一室で、デッサンに取り組み高校上級生といった集団と教師達に遭いました。生徒らは思い思いの像の前で描き、数人の教師が並んでベンチに腰を下ろしています。一人、生徒の間を廻って指導している男性がいます。

一日の内に博物館で、これだけの子供達の姿を見たのは初めてです。フランスでは、「国立博物館連合講師」の資格を有した者だけが、屋内の展示室で解説することが出来るとは後に知りました。ただ私の見た解説者が皆、果たしてそれに該当するのには定かではありませんが、展示室内では専門の係員に全て任せるといふ教師の姿勢は感じ取れました。

そして、博物館環境に幼いときから親しんでいる子供達の姿と、博物館と連携しながらの教育が学校教育に浸透している様子とが窺われ、とてもうらやましく思いました。(小池)

郷土資料館なんでもQ&A

Q 池袋の地名の由来は、その昔池があったからだと言いましたが、本当ですか。またその池は現在でも残っているのですか。

A 「池袋」の地名の由来についての質問はとて多いのですが、諸説あって断定は困難です。『質問の説は、文化一一(二八一四)年の『遊歴雑記』初編に「当村を池袋と号けし事へ、往古、夥しき池ありしによってなり。中古より段々と埋まりしかど、今もなを二百余坪もあらんや。」に拠っているとされます。

この九九〇坪余りの大池は絵図等にも描かれており、地名の由来の可能性はあります。しかし、この当時池は池袋村ではなく雑司ヶ谷村内に属していました。その理由は、池袋村は土地が高く池水を引くことができず、土地の低い雑司ヶ谷村に池の湧き水が弦巻川となって流れ出たため、雑司ヶ谷村の用水として使われるようになり、池の掃除や泥さらいなどを同村が行なうようになったからだといえます。この池は明治末期以降、徐々に縮小され、成蹊実務学校(現成蹊学園)や鉄道教習所内にあって「丸池」と呼ばれるようになります。昭和初期には弦巻川も暗渠化されました。一九五七年「丸池」は元池袋公園(現西池袋一一九)の一角を占め、六九年にはわずか三m四方の真四角の池となります。その公園も下水道工事により九一年に廃止され、現在池の面影は残っていません。(横山)

連載 一点の資料から 《その16》

豊島権守娘の浮世絵

写真の浮世絵には、舟に乗っている二人の女性を描かれています。右は町娘の姿をし、もう一人は笠をかぶって櫓を漕いでいます。絵の右には「豊島権守の娘」と書かれています。この町娘の女性が豊島氏の娘ということになるようです。

この絵の改印から考えて、幕末の安政六（一八五九）年四月直後に出版されたものとみられます。出版元は南伝馬町二丁目の山田屋庄次郎になります。この絵はかなり凝っていて、作者は二人います。舟の女性を描いた浮世絵師は二代目の歌川国貞です。また絵の上部の寺の境内を描いたのは二代目の歌川広重で、有名な安藤広重の婚養子として広重の名

を継いだ人です。絵の表題として「観音霊験記」とあることから、この絵は観音の霊験を題材としたものとみられます。上に描かれた寺は、秩父観音霊場三



観音霊験記・豊島権守の娘（複製）埼玉県小鹿野町法性寺蔵

込まれて水底に引き摺り込まれそうになりましたが、笠をかぶった女性に助けられました。それに感謝して秩父霊場を巡礼したところ、その女性が笠をかぶった法性寺の岩船観音であったことがわかったというものです。今でも法性寺の裏には、舟形の巨岩があります。

この絵の中には、その縁起の内容が簡略に記されています。それを書いたのが万亭応賀ですが、この人物は江戸末期の合巻作者で、戯作者・浮世絵師などのパトロンになって出版企画を行っていた人物です。この絵は、観音霊場にかかわるシリーズの一つとして出版されたものになります。

豊島氏は、秩父郡を本拠としていた平姓秩父氏の出身で、平安時代の終わりに秩父郡から豊島郡に移住したものと考えられています。豊島氏の先祖の地は秩父だったのです。この縁起そのものは江戸時代に作られたものですが、平姓秩父氏としての豊島氏の歴史的記憶と関係するものとして、たいへん興味深いものです。

（本稿執筆にあたって、たばこと塩の博物館学芸員湯浅淑子氏の御教示を受けた、記して感謝したい。）
（小林）

新連載

豊島やとべる

《その4》

千川上水

幻の感応寺分水

千川上水は、小石川や浅草にあった將軍の御

成り御殿と江戸北西部の武家屋敷や町家へ給水

するために、元禄九（一六九六）年に掘られた

水路です。天明六（一七八六）年から明治一三

（一八八〇）年までの間は上水としての利用が

停止され、流域の村々の農業用水として、もっ

ぱら利用されてきました。その間、寛政二（一

七九〇）年に小石川の一橋家抱屋敷への給水が

計画されました。このことについては、これま

で展示や資料集のなかで紹介しました。ところが

もう一つ、雑司ヶ谷にあった感応寺への給水

計画があつたことが「櫛櫛」という書物に記録

されています。

感応寺は天保六（一八七五）年から建設がは

じめられ、寛永寺・増上寺に次ぐ大伽藍を有す

る寺院でした。その敷地は現在の目白三・四丁

目の一部に当たります。

感応寺では放生会（仏教の不殺生成によって

生き物を池・川・山林に放つ供養のこと）を行

なっており、鰻を境内にある池に放流していま

した。その池の水量が、天保一一（一八八〇）

年の末ころの干ばつで減少してしまいました。

池底を掘り下げるなどの手当てをしましたが、

効果が上がりませんでした。

そこで考えられたのが、感応寺から少し離れ

たところを流れていた千川上水でした。ここか

ら水を引けば安定した水を供給できるとして、

効果が上がりませんでした。

そこで考えられたのが、感応寺から少し離れ

たところを流れていた千川上水でした。ここか

ら水を引けば安定した水を供給できるとして、

効果が上がりませんでした。

そこで考えられたのが、感応寺から少し離れ

たところを流れていた千川上水でした。ここか

ら水を引けば安定した水を供給できるとして、

効果が上がりませんでした。

そこで考えられたのが、感応寺から少し離れ

たところを流れていた千川上水でした。ここか

ら水を引けば安定した水を供給できるとして、

効果が上がりませんでした。

そこで考えられたのが、感応寺から少し離れ

たところを流れていた千川上水でした。ここか

ら水を引けば安定した水を供給できるとして、

効果が上がりませんでした。

そこで考えられたのが、感応寺から少し離れ

たところを流れていた千川上水でした。ここか

千川上水流域の長崎村地内から分水し、感応寺境内の池に給水し、下流は鶴巻川へ落とすという計画が立てられました。当時千川上水を管理していた千川善造も呼び出され、分水には問題ないと上申したようです。上の図はその分水の予定路を示したものの写しです。

工事経費として金七五両余と銀三八匁余が計上され、工事を待つばかりとなっていました。

この中には工事人足の手間賃のほか、地代や長崎村内へ架けられる橋の代金などが含まれていました。

感応寺より下流の雑司ヶ谷村では用水の竣工後は、用水として使用することが想定されていたためか、堀り敷の地代は支払わないことになっていました。それに対し、感応寺より上流の長崎村の地主に関しては地代を支払うことになっていました。

このような内容で感応寺への分水計画は進められていましたが、天保一二年一月大御所徳川家斉の死去に伴い、この計画は中止されることとなり、工事は行われませんでした。

また、給水先であった感応寺自体もその年の一〇月に取り潰しとなりました。

（伊藤）

ひそかに泣いていた軍神(特攻隊員)の母

長崎第四国民学校の疎開していた福島県原町(現・原町市、相馬野馬追いで有名)には陸軍の飛行場・飛行学校がありました。その兵隊たちは、疎開した子供たちをなぐさめ励ましたために学寮に遊びに来たり、逆に飛行場の宿舎に呼んだりしました。遊びに行つて飛行兵用の機内食を食べさせてもらうのが楽しみだったという、元疎開学童の方もいます。

敗色の濃い日本軍は、米軍の艦船に体当たり突入する、特攻攻撃(神風特別攻撃隊)を採用します。原町にいた飛行兵たちも特攻隊として出発していきました。

特攻隊の第一陣は一九四四(昭和一九)年一月二五日のフィリピン沖の攻撃です。この時、零戦戦闘機に乗って突入・戦死した中野磐雄(当時一九歳)は原町の出身で、両親は旅館・中野屋を営んでおり、そこは長崎第四校の学寮の一つでした。

軍国精神真つ盛りの中の当時のことから、中野磐雄は一躍、町の英雄・軍神・神鷲として讃えられ、遺族も国に尽くした名誉なこととされました。中野屋にいた一人の子供の父親が旅館

あてに出した賛嘆の手紙が当時の地元の新聞に載っています。

以上は、主に原町の郷土史研究家の二上英朗氏のご

教示によるものですが、その手紙を出した方が、豊島区発行の絵はがき「物語のある風景」を描かれた金沢佑光さんのお父さんであることがわかりました。

現在、長野県にお住まいの金沢さんから、「軍神にされたお母さんがだれもない仏壇の前で声をこらし泣いていた後姿が胸にしみついていきます」と、お便りを寄せていただきました。

正見寺の石段で

長野県鳥居村(現・豊野町)の正見寺は、高田第四国民学校の再疎開学寮の一つでした。

同校はそれまでいた長野県平穂村渋温泉が傷痍軍人の療養客が増えたことで、鳥居村など五村に移ったのです。



旧飛行場跡近くの公園墓地の一角にある特攻隊・戦没者慰霊碑

正見寺さんからは以前、浜から運んで使っていた机を寄贈していただきましたが、先頃、新たに手紙・公文書などが見つかったというお知らせと資料のコピーをいただきました。その中には疎開学童受入・出迎依頼状や児童職員の名簿、帰京輸送計画書などがふくまれ、大変貴重なものです。

手紙は帰京してからのお札の手紙十六通です。そのうちの一通にかかわる、鈴木綾子(現姓・阿倍)・敏夫のご姉弟から先日、お話しをうかがいました。

綾子さんは浜から移られ、敏夫さんは三月一日、四月一三日の空襲を受けた後、豊島区から直接、鳥居村に向かいました。女子は正見寺で、敏夫さんら男子は隣の中町公会堂(集会所)で生活したのです。着いたその日はご馳走が出ましたが、その次の日から質・量ともに一挙に低下したそうです。再疎

開は一層、食糧事情が危機的な状況のなかで行なわれました。

上の写真は面会に来た姉弟のお兄さんが正見寺の石段で撮ったものです。



(青木)

ただいま調査中ノ情報をお寄せ下さい

わたしを設計したのはだれ？

長崎二丁目にある長崎小学校では、体育館の改修工事を行なっています。その工事中に「壊しにくい頑強な建物の基礎が出てきた」と、作業に携わる人が手を焼くものが現れました。それは、長崎町の役場の建物的一部分です（長崎町の役場は長崎小学校の体育館の場所にありました）。

一九三〇（昭和五）年に発行された『長崎町概要』によれば、長崎町では、一九二三（大正一二）年の関東大震災以後、人口が急増し、そのために役場の事務量は増大し、場所が手狭になりました。そこで

で新庁舎建設の計画が持ち上がり、一九三〇（昭和五）年四月に起工され、そして一〇月に完成しました。この本の巻末に



No.1 眠りから覚めた長崎町役場の地下室 1997年3月5日撮影

「長崎町役場敷地並庁舎坪及工費額調」（設計図はありません）という記録が付いています。それによれば、敷地坪数は三四三坪（約一一三二㎡）、建物総延坪数は約二四八坪（約八二八㎡）、工事費総額は約二七五三円となっています。建物の本館は木造二階建瓦葺きで、一階の大部分は一般事務室、他に町長助役室、会計室、応接室、食堂、公衆便所等が作られ、二階には、一階の事務室とほぼ同じ面積の会議室や委員室、物置があります。本館以外には、木造平家スレート葺きの付属家（土木事務室、宿直室等）や木造平家トタン葺きの物置（薪炭置場として使用）もあり、さらに地下室があり、そこは、書庫（二四坪・約四六㎡）として利用していたようです。資料館では、この工事現場No.1へ行き、眠りから覚めた町役場を見ましたが、地下室は鉄筋コンクリートで造られ、壁の間には防水層がありました。また、柱の太さは、一辺が四九五mmで、丈夫に造られているという印象を受けました。この建物については、写真No.2のように写真があるため、外観を知ることができますが、設計者や建築業者はわかっていません。

ところで、この建物、ある建物に似ていると思いませんか？……そうですね！……西池袋二丁目の自由学園明日館です！……正面の屋根の形状や窓枠の意匠的部分が似ているのです。明日館は、フランク・ロイド・ライトが一九二二（大正

一〇）年に設計したものです。同氏の設計による建物は、帝国ホテルをはじめ日本各地にあります。長崎の町役場を設計したということは聞いていません。明日館が完成したのが一九二五（大正一五）年で、長崎の町役場が、その後の一九三〇年に完成していることや、西池袋と長崎が距離的にそれほど遠くではないことから考え、町役場は、ライトの建築の影響を受けた誰かが設計したと考えることはできないでしょうか。その時、設計者は、役場として使う建物を、どのような設計理念に基づいて建てたのでしょうか。屋根の色や壁の色はどんな色だったのでしょうか。今は想像をめぐらすばかりですが、いつか明らかになることを信じ、調査を進めていきたいと思っています。どんなに小さなことでも結構です。この件についての情報をお寄せください。お願いします。

（福岡）



No.2 長崎町役場庁舎新築落成記念 1930(昭和5)年 岩崎恵一氏提供

一九九七年度事業のお知らせ

ご存じの通り、豊島区はここ数年深刻な財政難に見舞われていますが、ついに郷土資料館も「非常事態宣言」をしなければならなくなりました。予算の大幅削減により、来年度の特別展は中止となり、刊行物も「年報」以外はすべて休刊となります。利用者の皆様にはご迷惑をおかけいたしますが、財政状況が好転するまでの間、資料館の充電期間として、収蔵資料の整理と区内の調査研究に力を注いでまいりたいと思っております。皆様のご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

◆収蔵展示

特別展にかわり、収蔵資料によるテーマ展示を年四回行なう予定です。

- 7月5日～9月下旬 戦争展
- 10月上旬～12月上旬 種屋のあゆみ展
- 12月中旬～2月中旬 中世豊島氏展
- 2月下旬～4月下旬 職人展

◆講座

当館学芸員による講座・見学会を行ないます。

- 5月～6月 雑司ヶ谷社会教育会館共催講座
(4回)
- 7月 戦争と平和を考える講座(4回)

◆刊行物

一九九六年度『年報へ付・研究紀要』第12号のみの刊行となります。

館だより「かたりべ」46号～49号(庁内印刷方式に変更)

収蔵展示リーフレット(庁内印刷、4回)

※『豊島の集団学童疎開資料集』Ⅶ、研究紀

要『生活と文化』第11号、『収蔵資料目録』

第9集は今年度は休刊となります。

◆調査

突発的な緊急調査のほかに、収蔵展示の準備調査、中世豊島氏調査、集団学童疎開調査、豊島区空襲の記録調査、区内神社の再調査などを予定しております。

◆博物館実習

9月30日～10月14日 六大学一名ずつ計六名の実習生を受け入れます(受付終了)。

※九七年度事業の詳細は逐次「広報」としまなどでお知らせいたします。乞うご期待!

〔お詫び〕

学芸プロの都合により、四コマ漫画「資料館の法則」はお休みさせていただきました。

編集後記

桜の季節となりました。かたりべ45号をお届けいたします。外注印刷による館だよりは本号で最後となり、来年度からは手作り印刷となります。内容も刷新(?)するのにあわせて編集子もバトンタッチします。在任中(二年間)のヒット企画といえば、あの4コマ漫画でしょうか(七回で終了の噂あり?)。新しい館だよりと資料館の発展を祈念して編集子が詠んだ「資料館川柳」(本邦初公開!)をもって、お別れの挨拶といたします。

* * *

知恵と工夫 絞り続けて はや七年

あー言えんノ ストレスたまつて あー胃炎

資料館 ワープロミスか? 死霊館

郷土館 重さに耐えて 強度館

十二年 現状保存の 展示室

資料館 今やダサイヨ 「知るう館」

今日もまた 区内を調査 チャリンコで

川柳を 詠んでいるほど 暇じゃなし

(横山)

かたりべ

No.45

1997年3月25日

豊島区立郷土資料館

豊島区西池袋2-37-4

電話03-3980-2351

豊島区広報印刷物L30-07-073
本紙は再生紙を使用しています